

学びのデザインシート（授業後）

主体的・対話的で深い学びを実現する授業構想【地歴公民科／日本史探究】

1. 対象 普通科2年生の文系選択クラス

生徒の約半数が四年制大学への進学を希望しているが、地歴公民を受験に使用する生徒は数名である。今年度は歴史総合を前期に履修済みであり、このクラスの生徒は日本史を軸として近現代の歴史の変化を捉えてきた。生徒は教員の説明をよく聞くことができ、ロイロノートに配信された課題をもとに論理的に考察し、表現する学習に取り組んでいる。

2. 単元名「国家と文化の形成」（全6時間）

3. 単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	原始・古代の政治・社会・文化の特色に関する基本的な知識を、東アジア世界の動向と関連付けて考察し、総合的に捉えて、複数の史資料を活用して理解している。
思考力、判断力、表現力等	旧石器文化から縄文文化への変化、弥生文化の成立に至る時期の日本列島の歴史的環境と文化の形成とを関連付けて時代の転換を理解し、原始社会の特色や古代の国家や社会との関わりについて多面的・多角的に考察し、表現している。
学びに向かう力、人間性等	旧石器文化から縄文文化への変化、弥生文化や古墳文化の成立、さらには邪馬台国の形成に至る時期の日本列島の歴史的環境と文化の形成に関する問いに対して、粘り強く自らの答えを出そうとしている。

4. 本時の目標（略）

5. 授業展開【 単元 】

解決したい課題や問い

「2～3世紀までに倭国はどのように東アジアの国々と交流をしてきたか」（論述課題）

考えるための材料A	考えるための材料B	考えるための材料C
対象との対話 ・教科書「精選日本史探究」p10～17 ※本文や注、掲載の諸資料（史料）	他者との対話 ・同グループ内の他の生徒の論述課題	自己との対話 ・自分が書いた1回目の論述課題

想定される活動	想定される活動	想定される活動
今一度、自分の書いた論述課題をブラッシュアップするため、これまでに参照した教科書の内容を見返す。	グループワークの中で、互いの論述課題を共有し合い、自分の論述課題と比較する。	材料Aと材料Bを踏まえて、自分の書いた論述課題に再び向き合い、内容をより良いものにしようとする。

対話と思考（対話を通じた協働的な問題解決のプロセス）

○講義で基本的な流れを理解しつつ、まずは個人で課題に取り組み、クロストークで生徒が周囲と解答を共有し、理解を深める。

○「2～3世紀までに倭国はどのように東アジアの国々と交流をしてきたか」を単元をまとめる論述課題とし、日本列島への人々の定住開始～邪馬台国の形成の流れを理解しながら、グループワークにおいて「主体的・対話的で深い学び」のもとで多面的・多角的に考察し、表現できるようにする。

○最終的に講義やクロストーク、グループワークなどで得た知識や理解したことをもとに論述課題に取り組み、理解力と表現力を深めさせる。

第1次（3時間）

①【講義】「列島に暮らしはじめた人々」（10分）⇒【課題】（ロイロノートで配信）「なぜ日本列島に人々がわたり、やがて定住してムラを作るようになったのか」（30分）⇒クロストーク（10分）

②【講義】「農耕の誕生」（10分）⇒【課題】「弥生時代の生活と縄文時代の生活との違いとは」「稲作の始まりがもたらした良い影響とは」（30分）⇒クロストーク（10分）

③【講義】「クニの形成」（10分）⇒【課題1】「ムラがクニにどのようにして発達していったのか」【課題2】「1～3世紀の倭国はどのように東アジアの国々と交流をしていたか」（30分）⇒クロストーク（10分）

第2次（3時間）

①【課題】グループワーク「倭国の東アジアとの関わりをこれまでの全ての授業を踏まえ、流れでつなげるとどうなるか」（50分）

②【課題】グループワーク「2～3世紀までに倭国はどのように東アジアの国々と交流してきたか」（50分）※ 前時の課題をふまえてまとめる。グループとしての最終的な解答をまとめる。

③各グループの解答を添削したものを教員がロイロノートに返却。修正すべき点を端的に示した論述完成のための「設計図」を各グループに一枚ずつ配布。これらを基にグループで清書に向けてさらに論述をよりよいものにしていく。（25分）⇒【単元の総括】個人やグループワークでこれまでに得た知識や理解したことをもとに、再び「2～3世紀までに倭国はどのように東アジアの国々と交流してきたか」に個人で解答（25分）。

※ 生徒（グループ）の反応を見ながら、臨機応変に声掛けをする。

※ グループワークで対話しながら得た知識や身につけた考え方をアウトプットするための個人での解答であるという、教員の意図をしっかりと生徒に理解させる。（個⇒グループ⇒個）

学習の成果（予想される生徒のあらわれ）

約4万年前から日本列島に朝鮮半島や中国大陸南部から人々がわたってきた。旧石器時代に狩猟や石材の交換などのために小さな集団で移動しながら暮らしていた日本列島の人々も、土器がつくられるようになった縄文時代には、食料の幅が広がったり、温暖化による海面上昇で海産資源が得やすくなったりすると、定住的となり、集団ごとにムラを形成するようになった。

弥生時代になり稲作が朝鮮半島より北部九州へ伝えられると、徐々に日本列島全体に広がっていき、食料生産が安定し、ムラの人口が増加していった。

人口増加が地域ごとの縄張りを作り、有力な集団が他の集団を従えてクニを形成した。特に北部九州のクニ（奴国など）は中国（漢）との交流があり、中国の歴史書では日本は「倭」と呼ばれていた。2世紀の倭国は大いに乱れていたが、女王卑弥呼のもとで邪馬台国を中心として複数の有力なクニがまとめられ、中国の魏に使いを送って交流をしていた。